

トピックス

世界中の一般医・家庭医が初夏の京都に参集 世界一般医・家庭医学会 2005 年アジア太平洋学術会議開催

世界一般医・家庭医学会 2005 年アジア太平洋学術会議(WONCA Asia Pacific Regional Conference 2005, 主催: 日本学術会議・日本プライマリ・ケア学会)が、さる 5 月 28~30 日の 3 日間にわたり、京都市の国立京都国際会館で開催された。同会議は、主にアジア太平洋地域の一般医・家庭医を対象に毎年開催されているが、日本での開催となった今回は、日本プライマリ・ケア学会、日本家庭医療学会、および日本総合診療医学会の三学会が合同の組織委員会を設置し、開催の準備を進めてきた。また、この三学会それぞれの学術集会も 5 月 28~29 日の両日に同時開催されたため、日本全国および世界各地から、一般医・家庭医が集う一大イベントとなった。

本会議では、黒川清氏(日本学術会議会長)、Jonathan Rodnick 氏(UCSF)、尾身茂氏(WHO 西太平洋地区事務局長)らによる講演の他、「グローバル・スタンダードとしての家庭医療・一般医療」などをテーマにしたシンポジウム、「研究」、「教育」をテーマにした多数のワークショップが企画され、盛会となった。特に 2 日目の夜に開催された「カルチャーナイト・パーティ」では、世界中から参集した医師が一堂に会し、交流の輪を広げた。

一方、同時開催された日本の三学会による学術集会では、日本プライマリ・ケア学会が「補完・代替医療」、「在宅医療と病診連携」、「電子カルテ」などを 6 題のシンポジウムを組んだ他、日本家庭医療学会が「家庭医研修プログラムの現状と将来—家庭医療専門医に向けて—」をテーマにシンポジウムを、日本総合診療医学会が「新医師臨床研修制度における総合診療部の役割」をテーマにパネルディスカッション、および Robert Wachter 氏(UCSF)による特別講演「ケアのホスピタリスト・モデル」を企画し、いずれも多数の参加者を集めた。

このなかで、シンポジウム「家庭医研修プログラ

ムの現状と将来」では、まず、20~30 歳代の若手家庭医らが登壇、それぞれの家庭医療実践、家庭医研修の実際を報告すると同時に、家庭医療専門医や家庭医研修プログラムへの期待を述べた。それを受ける形で講演した学会長の山田隆司氏(地域医療振興協会常務理事)は、「誰のための専門医か、と考えたときに、自分たちのためのものを考えるべきではない。医師にとっての資格よりも、まず質の保証をめざすべきだ」との考えを示し、学会の戦略として、3 年間の「後期家庭医療専門研修プログラム」を学会として認定し、評価を行う計画を提示した。

一方、特別講演「ケアのホスピタリスト・モデル」では、サブ・テーマとして「米国で最も急速に増加している専門性となった理由」が掲げられ、急速に増加している「ホスピタリスト」について、Wachter 氏が解説した。

氏によれば、かつて内科研修医の進路は、ジェネラリストとしてプライマリ・ケア医療の道を歩むか、急性期医療を志向し、サブスペシャリティをもつかだったが、最近では、ジェネラルでありかつ急性期にも対応する病棟医である「ホスピタリスト」というキャリアオプションが確立されつつあるという。また、Wachter 氏は、「最近の研究から、ホスピタリストは、病院コストや在院日数を減らし、医療の質も落とさない(おそらく上げる)ことが強く示唆されている」と述べた。

ホスピタリストの団体である Society of Hospital Medicine(SHM)は、1997 年の設立当初にはほとんど会員がいなかったものの、2004 年には 4500 名を数えるまでになり、新たな医師の活躍の場として急速な広がりを見せているという。米国と日本は保険制度をはじめ医療制度が根本から異なるが、病院医療や総合診療医・一般内科医のあり方を考えるうえで興味深い動向と言えよう。